

ハイデルベルク信仰問答講解説教 11 「真の救済者」(2011年10月16日 礼拝説教)

【聖書箇所】

【都に上る歌。】目を上げて、わたしは山々を仰ぐ。わたしの助けはどこから来るのか。わたしの助けは来る／天地を造られた主のもとから。どうか、主があなたを助けて／足がよろめかないようにし／まどろむことなく見守ってくださるように。見よ、イスラエルを見守る方は／まどろむことなく、眠ることもない。主はあなたを見守る方／あなたを覆う陰、あなたの右にいます方。昼、太陽はあなたを撃つことがなく／夜、月もあなたを撃つことがない。主がすべての災いを遠ざけて／あなたを見守り／あなたの魂を見守ってくださるように。あなたの出で立つのも帰るのも／主が見守ってくださるように。今も、そしてとこしえに。
(詩編121：1-8)

このように考えていると、主の天使が夢に現れて言った。「ダビデの子ヨセフ、恐れず妻マリアを迎え入れなさい。マリアの胎の子は聖霊によって宿ったのである。マリアは男の子を産む。その子をイエスと名付けなさい。この子は自分の民を罪から救うからである。」このすべてのことが起こったのは、主が預言者を通して言われていたことが実現するためであった。「見よ、おとめが身ごもって男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」この名は、「神は我々と共におられる」という意味である。(マタイ1：20-23)

【説教】

今日は、第11主日のところ、問29-30を手がかりにして、共に聖書の福音に耳を傾けてまいりたいと思います。信仰問答では、すでに問26から「使徒信条」についての問答を始めておりますが、前回、前々回と使徒信条の第一項「我は天地の造り主、全能の父なる神を信ず」についての問答がありました。そこでは特に神さまの創造と摂理について教えられておりましたが、肝心なことは、父なる神さまを単に世界の創造主としてだけ語るのではなく、常に御子イエス・キリストとのつながりにおいて、世界の創造と摂理を語っているということです。問26前半を読みましょう。

父というのは、もちろん御子に対して父であるわけですが、キリストゆえに神さまはわたしたちの神さまであり、わたしたちの父でもあられる。そしてこの世界をこの父と子の交わりへと創造し、更にはその御手をもって今なおこの世界を保ちまた支配しておられるということがここに示されています。それはこの世界が今も父と子としての交わりへと向かっていることを示しています。そこにこの世界の目的、人間の造られた目的があるのです。その目的に向かって神さまの御心は常に働いている。ですから神さまはただ世界を造られただけではありません。その御心に従って、わたしたちの人生を今なお導いておられるのです。それが神さまの摂理です。そしてその確かな証しとして御子イエス・キリストが与えられました。このキリストを仰ぐとき、わたしたちはたとえ試練、逆境にあっても、揺るぎない将来の救いの確信をもって生きていくことができるのです。

そのように、父なる神さまについて語るのに、そこには御子の存在は欠かせません。それはわたしたちの信仰がやはり三位一体の神さまを信じる信仰だからです。父・子・聖霊は常に共に働くのです。それぞれが単独で働いているわけではありません。そこが重要です。

時として、わたしたちの救いが「絵に描いた餅」のように平面上の現実的ではないものになってしまうことがあります。創造信仰も何かおとぎ話のように、具体的な信仰として立ち上がってこないということがあります。でも三位一体の神さまの御業として創造信仰を語る時に、その御業は現実のものとして、立体的に立ち上がってくるのです。神さまの創造と摂理が今のわたしの生活に直接関わってくるのです。問27-28にあるように、「全能かつ現実の神の力」「忍耐」「感謝」「確信」そういう積極的な生き方がそこから生まれます。教理を身につけることが、そのようなわたしたちの具体的な生活を支えることを期待します。

さて、今日のところからは、使徒信条の第二項、子なる神、イエス・キリストについての告白に入ります。使徒信条におい

ても、この第二項は信条の中心となる部分であります。この信仰問答においても、やはりこのところの問答は多くの分量を割いて、その言葉一つ一つを丁寧に解き明かしてまいります。早速、問29から読んでいきましょう。

ここでは、まず「イエス」という名前について教えています。「名は体を表す」とありますように、まさにこの名前に神さまの本質、イエス・キリストの本質があります。この名前は、ここで信仰問答が示すように「救済者」という意味があります。「イエス」はギリシャ語ですが、その元になった言葉はヘブライ語でありまして、皆さんもお聞きになったことがある「ヨシュア」という名前です。それは「主は我が救い」という意味です。そこから「救済者」とも呼ばれるわけです。この名前はユダヤ人にとっては、ごく普通の一般的な名前でありました。子どもを授かった時に、神さまは我が家を顧みられた、救われたと言って、「ヨシュア」と名付ける。そういう家庭が多くありました。ただ主イエスの場合は、ヨセフとマリアがそのように考えてつけたのではなく、これは福音書にあるように、天使がヨセフの夢に現れて、イエスと名付けるように命じたのであります。言わば、その名前は上から与えられた名前です。それは人間の側の思いというよりは、神さまの側の御旨、御心が込められている。それは使命と申し上げてもよいでしょう。それが他の一般的なイエスとは違う、御子イエスにのみ当てはまる、この名前の持つ響きなのであります。

では、どのような救済者としてイエスはその名を帯びて、この地上にいられたのでしょうか。信仰問答では「それは、この方がわたしたちをわたしたちの罪から救ってくださる」とあります。ここに明確に主イエスの到来の目的、救い主としての使命が示されています。それは「罪からの救い」ということです。何よりそのことは福音書において明らかにされておりました。マタイ1：21を読みましょう。主イエスがこの世にいられた目的は何か。わたしたちを罪から救うこと。そこが分かっているようでいて、分かっていない。わたしたちは神さまの救いをどのように受け止めているのでしょうか。

罪の問題を、表面的な社会悪としてだけしか受け止められない場合があります。もちろんそういう社会悪も罪の問題の一部として知る必要があるでしょうけれども、しかし聖書はそこだけを見ているわけではありません。もっと根本的な人間の問題、それは表面には表れない、隠れたところに潜む、従って本人もなかなかその自覚が起こらない。そういう部分に迫るのであります。もし表面的な社会悪だけでよいというところであれば、それこそ倫理、道徳の問題です。学校や市民講座でも教えられることです。でも学校で繰り返し道徳が教えられても、一向に

社会は改善されません。それは一時的に人間の表面の意識が改善されても、なお人間の一番深いところにある罪が残るからです。そこが重要なのであって、そこが解決しなければ、この社会にある様々な問題は繰り返されるでしょう。教会が取り組まなくてはならないのは、この部分です。そこは学校では教えられない。教会でしか扱うことができないのです。なぜなら教会だけが、神の言葉を語ることができるからです。人間の過ちを人間が自分で論ずことはできません。それこそ「手前味噌」です。人間の過ちを指摘し、論ずのは、人間の言葉ではなく、神の言葉だけなのです。

では聖書は、人間の罪をどのように考えているのでしょうか。それは常に神さまと人間との関係において捉えるべきものとして示しています。イザヤ書に「お前たちの悪が神とお前たちの間を隔て、お前たちの罪が神の御顔を隠させ、お前たちに耳を傾けられるのを妨げているのだ」（59：2）とあります。神さまと人間との間を隔てる。そして御顔を隠させる。そういう断絶が起こった。それは創世記第3章の墮罪物語が示すように、神さまとの約束を破り、自分が神のようになろうとした。そこに罪の根があります。その結果、人間は神さま御前から失われ、神さまなしに生きるようになりました。それが根底にあって人間のあらゆる悲惨を生み出します。

その罪を御言葉は明らかにするのです。幾つか聖書の御言葉を読みましょう。神の言葉の作用として代表的なところでヘブライ4：12以下があります。「自分のことを申し述べねばなりません」と何を申し述べるのか。罪です。その根底に潜んでいる罪があらわにされるのです。だから申し開きをしなくてはならない。神さまの御言葉はそのように働く。1コリント14：24以下も読みましょう。「預言」とは神さまの御言葉を語ることです。更に言えば、キリストの福音、罪の赦しを語ることです。その預言が語られているところに、罪の自覚が促され、悔い改めて神さまに立ち返り、やがて神さまに礼拝をささげるのです。

神さまの御言葉を取り次ぐ教会だけがこの罪の問題を扱うことができます。そしてこの罪を解決する道がここに示されるのです。それは神の言葉が肉体をとって、わたしたちの世に来られるという仕方と与えられました。それが神の御子イエス・キリストに他なりません。その方、神さまの御言葉そのものであるお方でなければ、そのような救いは与えられないのであります。「唯一の救いをほかの誰かに求めたり、ましてや見出すことなどできない」とあるとおりであります。罪からの救いはこのお方でなければ与えられません。

そのことを問30では更に詳しく教えます。この信仰問答は宗教改革の時代に作られました。ですからここにはローマカトリック教会との対立が明確に示されます。「聖人」という言葉が出てきました。自分の救いをこの「聖人」に求めたりするものです。「聖人の通功」と言います。皆さんの知るところでは、代表的なものにマリア信仰があります。マリアを神の母として特別な位置に置くのです。わたしたちプロテスタント教会では、マリアもまたわたしたちと同じ罪人の一人です。しかしローマカトリック教会では、マリアに特別な位置を与える。このマリアの功德に与ることによって、罪が軽減される。現在カトリックの教義ではそのようには教えておりませんが、かつてはそういう教えまであったと言われます。

イタリアのパチカンに行きますと、使徒ペトロの像が立っている。よく見るとそのペトロ像の足の指がすり減っています。世界中から巡礼者が訪れ、そのペトロの功德に与ろうと、足をなでたり、キスをする。そのうちに足がすり減ってきている。他にもフランスのルルドの泉とか、そういう伝説的なものに特別な力を見出そうとする。それは唯一の救済者であるイエスを信じていることになるのでしょうか。

もう一つここに「自分自身」とあります。つまり自分も救いを確保することができるかと考えることです。それは例えば、自分の業によって罪が軽減されると考えて、断食をしたり、施しをしたりする。時にわたしたちが行いに熱心になると、そ

う間違いを犯しやすい。自分の業で救いを獲得できると考える。それはキリスト以外のものにより頼んでいるということになるのではないのでしょうか。主イエスを信じると言いながらも、どこかでそこに頼り切れない。聖人や自分自身やほかのどこかに、あたかも自分を罪から救える力があるかのように考える。このことはよほど注意していないとすぐにもそういう惑わしに陥ってしまうのです。

ある神学者が、日本という異教社会において特にその誘惑は大きい。それは冠婚葬祭に表れると言います。本来の信仰にないもの、余計なものをつくったがる。考えてみればそうです。結婚式も本来教会がするものはずっとシンプルなものでしょう。それがいろいろと余計なものが付く。その一つ一つにお金がかかる。商業化している。葬式も、前夜式や献花は本来なくてもよいものです。でも仏教のお通夜にあたるものとして前夜式、また焼香にあたるものとして献花をする。あたかもキリストだけでは足りないかのように。神さまの恵みでは足りないかのように。そこに神さまのご支配に委ねきれないわたしたちの弱さが表れている。「イエス」の名、救済者という名を口にする時に、わたしたちはそのような中途半端な信頼をもって、この御名を口にするのでしょうか。

この信仰問答があげている聖書の箇所にも、使徒言行録の御言葉があります。「ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです」（4：12）このイエスこそが完全な救いを行ってくださいました。そのために御自身の命をささげてくださった。これ以上の何があるでしょうか。神さま御自身がわたしたちを罪から救い出し、わたしたちを御自身の命で満たしてくださったのです。十字架と復活の御業がそのことを示しています。ここにわたしの「救いに必要なことすべて」があります。父なる神さまは子であるわたしたちに必要なすべてを用意されるのです。イエスという尊い御名を口にする度に、イエスこそが真の救済者であること、その代わりや付け足すものは他にないことを覚えましょう。祈りをささげます。

天の父。わたしたちの救い主、イエス・キリストをお与えくださりありがとうございます。ここに完全な救いがあります。何も付け加えたり補う必要はありません。この名を呼ぶことよって、わたしたちの心が繰り返し、真理に向かって建て直され、新しくされますように。他のものにより頼む弱さを打ち砕いてください。主の御名によって祈ります。アーメン。